

氏名（本籍）	山崎 貴史
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 7409 号
学位授与年月	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	スポーツ空間におけるマイノリティの排除と包摂に関する研究

主査	筑波大学教授	教育学博士	清水 諭
副査	筑波大学教授	教育学博士	菊 幸一
副査	筑波大学教授	博士（学術）	藤堂良明
副査	筑波大学准教授	博士（文学）	清水知子

### 論文の内容の要旨

本論文は、スポーツ空間が社会的生活を営むマイノリティにとって、どのような意味をもっているのかについて、排除と包摂の両義性に焦点を当て、マイノリティ当事者やその支援者の実践に基づいて分析・考察することを目的とした。

本論文の対象のひとつは、公園にスポーツ施設を設置する際に排除の対象となる野宿者であり、もう一つの対象は、都市の中心で行われる名古屋シティハンディマラソンに参加する重度身体障害者とした。

第1章では、「スポーツによる都市開発に関する研究」と「スポーツによるマイノリティ開発援助に関する研究」を検討し、従来の研究がスポーツ空間の両義的作用を捉えられていない点を指摘した。

第2章では、排除／包摂論を検討し、排除に関しては空間的側面において、ある集団が別の集団を財へのアクセスや社会・経済・政治への参加から締め出すプロセスとし、包摂に関しては当事者の集団的な社会運動において、周縁化された人々が社会・経済・政治の領域に参入することで、文化的承認と経済的再配分を同時に達成することと定義した。分析枠組みとしては、西澤晃彦の隠蔽権力論とナンシー・フレイザーの下位に位置づく者による対抗的公共圏の理論を採用している。隠蔽権力は、①異質な存在としてのマイノリティを何らかの作用によって「更生」可能な者とそうでない者に分類し、②「更生」不可能な者を空間的に分散・隔離することで、隠蔽＝不可視化していくプロセスである。下位の者による対抗的公共圏は、マイノリティがアイデンティティ、日常的課題、そして政治的課題を問題化する公共圏であり、支配的な集団に対抗しつつ、公共圏との対話に備えた拠点として捉えることができる。

第3章と第4章では、公園にスポーツ施設を設置することで居住していた野宿者を排除する事例として、名古屋市中区栄にある若宮大通公園、東京都墨田区にある錦糸公園、そして江東区にある豎川河川敷公園を取り上げて分析・考察した。そこにおいて、スポーツ施設は公園から野宿者を排除する手段と

して立ち現れていた。そのプロセスは、公共空間であるはずの公園が野宿者に占拠されていることが〈問題化〉され、のちに行政による包摂的制度における選別によって、野宿者が「社会的不適合者」として〈再カテゴリー化〉され、排除の正当化が図られる。そして、「ホームレスが居住しづらい環境整備」を目的として〈スポーツ施設設置計画〉が企画され、最後、それを理由にして〈野宿者排除〉が実行されていくことを明らかにした。その上で、スポーツ施設は、それに「ふさわしい」人々としての若者、子ども、家族、元気な高齢者を想定し、野宿者の可視性が高まる場所に設置され、居住することができないように管理する機能をもつ。すなわち、公園の公共性は、こうしたマジョリティにとっての公共性の維持によって位置づけられてきたことを示した。しかしながら、一方で、公園におけるスポーツ空間が、野宿者の居住と彼らを支援する活動の余地を残し、野宿者支援者と行政とが協同して炊き出しや結核診断といった活動を行っている事実があった。ここから、公園におけるスポーツ空間の設置は、公園の公共性という観点からだけでなく、実際にどのように利用されてきたのかという観点から捉え直していく必要性のあることが示唆される。

第5章と第6章では、名古屋シティハンディマラソンに出場する重度障害者と主催者である「愛知県重度障害者の生活をよくする会」（以下、よくする会）への参与観察とメンバーに対するインタビュー調査から重度障害者の排除の問題を施設との関係で考察した上で、ハンディマラソンの意味について明らかにした。全身性の障害を有するため、自らこぐことのできない重度障害者は介助者に車いすを押しってもらって名古屋の中心街を走る。ハンディマラソンは、彼らが排除されてきた空間を占有し、マラソンを通して重度障害者を可視化する実践となっている。すなわち、公道を利用し、街そのものを利用するマラソンであるからこそ、施設という空間に隠蔽されてきた重度障害者を可視化することが可能になる。さらに、そこに健常者が参加し、障害者の介助を経験することで、障害の有無による差異を超えた視点を供与する。つまり、重度障害者が自ら自立生活を参加者たちに伝え、広めようとする場になっていることに加えて、健常者と当事者との相互行為が生まれる契機になっている。すなわち、このハンディマラソンは、対抗的公共圏としての「よくする会」が障害の有無を差異化する戦略をとりながら、支配的公共圏との相互作用が可能になる包摂的空間を生成することが明確になった。

以上のことから、本論文は、スポーツ空間がマイノリティの可視性の側面において、排除と包摂の両義的作用をもたらすことが明らかになった。そして、そこには野宿者や重度障害者の社会的位置が象徴的に反映されながら、当事者と支援者による対抗的实践が生成されることでスポーツ空間を変容させることも可能になることが明らかになった。

## 審査の結果の要旨

最終試験においては、空間に関する概念をめぐる理論的背景に関して、表象の意味を含めた議論を深める必要があること、そして野宿者と重度障害者を取り上げたことに対して現代社会が直面するネオリベリズムの浸透による公的空間と私的空間との関係性の変容に関する状況を踏まえるとより深い議論に至ったのではないかと指摘があった。それはまた身体の管理に対する権力作用についての議論につながることで指摘された。しかしながら、野宿者と重度障害者、そして彼らを支援する関係者に接近し、その地平からスポーツ空間を通して公共性について議論した点は、高く評価された。

平成27年1月28日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。